

第5号

# Σωή

ゾーエー



## イルゼ・アイヒンガー『鏡物語』について

早稲田大学ドイツ語ドイツ文学専修 久保結菜

『鏡物語』はオーストリアの作家イルゼ・アイヒンガーによる短編で、1949年に三回に渡って「ウィーン日刊新聞」に掲載され、その後1952年に短編集『絞首台の下の演説』に収録されました。その後、『絞首台の下の演説』は新たな短編を加えて、『縛られた男』へと改題されて出版されています。

アイヒンガーによれば、「鏡物語」は1948年のはじめに書き始められたもので、彼女の長編小説『より大きな希望』の後に書かれた最初の散文作品ということになります。作品が完成をみるのは1949年の冬のことですが、この作品を執筆する間にいくつか別の短編が書かれています。この「鏡物語」でアイヒンガーは、「47年グループ」の会合でグループ賞を受賞しています(当時、もともと発行していた雑誌が発禁処分となったため、この文学グループは雑誌を刊行するのではなく、会合を開き作品の朗読をした上で互いに批評するというスタイルをとっていました)。

この作品では、「君」という作中人物に焦点を当てて物語が展開していきますが、果たして、「君」に呼びかけるこの声の主はいったい誰で、どこから作品世界を眺めているのでしょうか。死者は自らの死を語ることはできないために、他者の声により語られるしかないようです。語られる出来事の始点は「君」の死であり、「君」の死の前の出来事は鏡越しにのみ、つまり、逆転した時間の流れに則った形でのみテキストに現れてきます。そのために、読者は「君」の体験を、逆行する流れの中で、いわば鏡に映った像としてのみ知ることになります。時間の逆転は「君」が赤子になるまで続いていき、誕生の日までかえてきたところで幕引きとなりますが、この「始まりの瞬間」に物語が終わることによって、始まりと終わりが重なり合った円環が浮かび上がってきます。ここに、直線的かつ、一方向に流れていく時間から、終わりから始まりへと送り返され、巡っていくような時間の流れへの移行が見て取れるかと思います。また、この作品における「直線的な、止まることのない時間」からの転換としてもうひとつ挙げられるのが、語り手の声に並走する形で背後から響いてくる「彼ら」の声です。「彼ら」の言葉からは、「彼ら」が「君」の死の瞬間を見届けていることが伺えます。この「彼ら」の声によって、また時間の流れが多層的になり、出来事や時間といったものがその輪郭を滲ませていくように見えます。その一方で、鏡とはあくまで空間ではなく光の反射でしかないために、出来事の逆転、その全てが単なる走馬灯、虚像でしかない可能性も依然として残っています。アイヒンガーの短編においては、転換、あるいは反転の契機が根底にあるようですが、この作品においても同様に、鏡に反射されることで、交錯するはずのなかったものが混じり合っていく過程が描かれているようです。

なお、翻訳したテキストは、*Ilse Aichinger Werke. Der Gefesselte. Erzählungen(1948-*

1952), 9. Aufl. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag), 2016, Bd. 2. 所収の „ Spiegelgeschichte“に拠ります。

## 鏡物語

君のベッドが広間から押し出され、天が緑になるのが見えたなら、そして代理司祭の弔辞の手間を省いてやりたいと思うなら、それが君の起き上がるべき時だ、静かに、朝、光が鎧戸越しにほのめく時に子供が起き上がるように、密かに、看護師に見つからないように、早く！

けれどその時には、彼——つまり代理司祭はもう既に話しに取りかかっている。君は彼の声を耳にする、若く、熱心に、止め処なく、もう話してしまっているのが聞こえる。なるがままに任せよう！彼の敬虔な文句を、見通しの悪い雨の中に紛れさせてしまおう。君の墓穴が開いている。まずは彼の早合点を途方に暮れさせてやろう、そうしたらその早合点だって救われる。

もし君が放っておくなら、仕舞いにはすでに始めてしまったのかどうかすら、彼にはわからなくなってしまうだろう。そしてわかっているがために、彼は担ぎ手たちに合図を送ってしまう。そうすると、担ぎ手たちは多くは訊ねずに君の棺をまた持ち上げる。彼らは棺の蓋から花輪を取って、首を垂れて墓穴の縁に立つ若い男に返してやる。彼は花輪を受け取り、当惑した様子でリボンをみんな真っ直ぐに伸ばす。彼がほんの一瞬顔を上げると、雨が一对の涙になって彼の頬を流れていく。

一行は壁伝いにまた引き返していく。小さく見窄らしい礼拝堂に置かれた蠟燭に再び火が灯されて、代理司祭が死者のための祈りを捧げる、君が生きられるように。彼は若い男と熱烈に握手をし、すっかり参ってしまったのか、若い男に向かって、ご多幸を、と挨拶する。これが代理司祭にとって初めての埋葬だったので、彼は喉元まで真っ赤になっている。言い直すのをまたずに、若い男はいなくなってしまう。さて、まだ何が残っているというのか。弔問客にお見舞いを言ってしまうえば、死者を家に送り返してやること以外には何も残っていない。

すぐに車が君の棺を乗せて、また長い道を引き返していく。右にも左にも家々が立ち並び、すべての窓辺に黄色い水仙が飾られている、水仙はもちろん花輪にも編み込まれているけれども、どうしようもないことだ。子供たちは閉ざされた窓のガラスに顔を押しつけている。外は雨が降っているというのに、子供がひとり、玄関から走り出てくる。その子は霊柩車の後ろに掴まるが、振り落とされて置き去りにされるだろう。子供は両手を目の上にかざして、不機嫌そうに君たちを目で追うだろう。でもいったい、墓地の通りに住んでいる子どもはこれ以外にどこで飛び上がればいいのか。

君を乗せた車は交差点で信号が緑に変わるのを待っている。雨足が弱まってきた。雨粒が車の屋根の上で踊っている。遠くから干し草の匂いがする。通りは雨に濡れたばかりで、天

は自らの手をすべての屋根の上におく。車はただ儀礼的に少しの間だけ路面電車と並走する。二人の小さな若者が通りの傍で賭けをする。けれども、路面電車に賭けた方は負けてしまうだろう。君は彼に警告することができたかもしれないが、こんな賭けのために棺桶から出て行ってやる者などいないのだ。

辛抱するのだ。何と言っても初夏なのだから。朝がまだ長々と夜まで達している。君たちは間に合う。暗くなって子供たちがみんな道路の端っこからいなくなってしまう前に、車はきっと病院の敷地内に入っているだろう、月の光が一条、連れ立って入り口に差し込んでくる。すぐに男たちがやってきて君の棺を霊柩車から下ろす。そして、霊柩車は上機嫌で家路につくのだ。

彼らは君の棺をふたつめの入り口から構内を通って霊安室へと運び込む。そこでは何ものせられていない台座が、黒々と、斜めに傾いて、高く上げられた状態で待ち構えている。彼らは棺をその上に据えて再び蓋を開けるのだが、そのうちの一人が悪態をつく、というも釘があまりにきつく打ち込まれていたからだ。この忌々しい周到さめ！

まもなくそこへあの若者もやってきて、花輪を元に戻してくれる、もうその時なのだ。男たちがリボンをきちんと整えて、花輪を前におく。すると君は安らかでいられる、花輪がきちんとおかれているおかげだ。朝までには萎れた花々も瑞々しくなり、閉じて蕾になる。夜の間君は一人きりでいる、十字架を両手で持ったまま。その日はうんと静かに過ごすだろう。これから先、君がこんなに静かに横になつていられることはもうないのだから。

翌朝、あの若い男がまたやってくる。雨が彼に涙をくれないために、彼は虚空を見つめて指の間で帽子を回している。彼らが棺を床に下ろす前になつて初めて、彼は両手でわつと顔を覆う。彼は泣いているのだ。君はもうこれ以上霊安室にはいられない。どうして彼は泣いているのだろう。棺の蓋は外されたまま乗せてあるだけ、晴れ渡った朝だ。雀が高らかに鳴いている。雀たちは知らないのだ、死んだ者を目覚めさせることは禁じられているなんてことは。あたかも彼の一步一步の間にグラスが立ててあるかのような足取りで、若い男は君の棺の前にやってくる。風は冷たく、遊び好きで、まだ未熟な子供のよう。

彼らは君を病棟まで運んでいって、階段を上がっていく。君は棺から取り出される。君のベッドは整えられたばかりだ。若い男が窓越しに構内を見下ろすと、中庭では二羽の鳩がつかいになつてクウクウと騒々しく鳴いている。彼は嫌悪感を覚えて顔を背ける。

そしてその時君は既にまたベッドに横たえられている。彼らはまた君の口元を布で巻くのだが、その布のせいで君は他人のようになってしまう。その男は泣き喚いて君の上に体を投げ出す。男たちは彼をそっと引き離す。「静かに！」とどの壁にも書いてある、病院はこの頃いっぱいいっぱい、死んだ者はそう早くに目覚めるわけにはいかないのだ。

港から船が唸りをあげているのが聞こえる。出港か、はたまた着港か。誰にそんなことがわかるというのだろう。静かに！静かにするのだ！死者が静かに眠れる時を待たずに、死者を起こしてはいけない。けれど船は汽笛を鳴らし続ける。もう少ししたら、彼らが望もうと望むまいと、君の頭から布を外してやらなくちゃならない。それから彼らは君の体を清めて

シャツを変えてくれる、そして彼らのうちの一人が素早く君の胸の上に身をかがめる、そう、素早く、まだ君が死んでいるうちに。長い間ではないが、それは船のせいだ。朝はもう暗くなっていく。彼らは君の目を開けてやる、君の目は白く煌めいている、彼らは今やもう、君の穏やかな様子について何も言わない。天のおかげで、彼らの口の中で少しずつ消えていくのだ。

まだ待て！　すぐに彼らは行ってしまうから。誰も目撃者にはなりたくないのだ、目撃者であるというかどで今日もなお火刑に処されてしまうのだから。

彼らは君を一人にさせておく。彼らが君を一人にしておくことで、君は目を開けて緑の天を見ることができる、彼らが君を一人にしておく、君が呼吸を始めることができるように。重く、息苦しそうに、そして深く、錨鎖が解かれる時のようにガチャガチャと音を立てる呼吸を。君は棒立ちになって母を大声で呼ぶ。なんて緑な空なんだろう！

「熱に浮かされた幻覚が引いていく」と君の背後から声が聞こえる。「死に際の苦しみが始まる！」

ああ、彼らだ、彼らが何を知っているというのだろうか！

今こそ行くのだ！　今がその時だ！　みんな呼ばれて行ってしまった。行こう、彼らがまた戻ってくる前に、彼らの囁き声がまたうるさくなる前に、階段を下って門番の傍を通り抜けて、夜になる朝をくぐり抜けて。鳥たちが暗闇の中で鳴いている、まるで君の痛みが歓声をあげ始めたかのように。家に帰れ！そして、自分のベッドに戻って横になれ、ベッドの継ぎ目が軋んで割れても、掻き乱されたままでも。そしたら君はもっと早く元気になれるのだから！　そこでは君はただ三日間自分ひとりで暴れ狂って、たっぷり心ゆくまで緑の空の下の自分を楽しめば良い。三日間、上の奥さんが持ってきてくれるスープを押しつけておいて、四日目に飲めばいい。

七日目の安息の日に君は出ていく。痛みが君を駆り立てて、君はいくべき道を見つけるだろう。

最初は左に、次は右に、それからまた左にと、とても粗末で海に通じている以外にない港道を横切る。ただ、あの若い男が君のそばにいてくれさえすれば。けれど若い男は君のそばにはいないし、棺の中での方が君はずっと綺麗だった。今君の顔は痛みで歪んでいるけれど、痛みはもう歓声をあげるのをやめている。そして今や汗がまた君の額に浮かんでいる、道中ずっと、いいや、棺の中で、そこでは君はずっと綺麗だったのに！

子供たちは道沿いでボールで遊んでいる。君は子供たちの中に走っていく、君は走る、まるで背中を前にして走るみたいに。子供たちのうちの誰も君の子ではない。いったいどうして、彼ら子供たちのうちの一人が君の子供のはずがアろうか、君は飲み屋に暮らしている老女のところに行くというのに。どうやって、その老女が火酒の代金を払っているのかは、港中みんなが知っている。

彼女は扉のところに立っている。扉は開け放たれていて、彼女は君に向かって手を差し伸

べている。薄汚れた手だ。そこにあるものはみんな汚れている。焔には黄色い花が飾ってあるが、その花は花輪に編み込まれていたのと同じものだ、確かにまた同じものだ。それに、老女はいやに親切だ。階段はここでもやはりギシギシと軋む。船は汽笛を鳴らしているが、君がどこへ行こうと、船はいたる所で汽笛を鳴らすのだ。痛みは君を揺さぶるけれど、君は叫ぶわけにはいかない。老女に火酒の代金を渡すのだ！君が彼女に金さえ渡せば、彼女は君の口を両手で塞いでおいてくれる。たくさん火酒を飲んでも酔ってはいない、この老女は。彼女は生まれてきていないものを夢見たりはしない。罪のない子供は、あえて彼女のことを聖人たちに告げ口しようとはしないし、罪ある子たちだってそんなことはしない。でも君は—君はそれをやってしまう！

「私の子供を生き返らせてくれ！」

こんなことを老女に求めたものはまだ一人もいなかった。けれども君はそう要請する。鏡が君に力をくれる。曇った鏡には羽虫がいたるところにこびりついている、その鏡が君に、まだ誰も求めたことのないことを要求させてくれるのだ。

「子供を生き返らせて、そうしてくれないなら、あんたの黄色い花をひっくり返して、目玉をひっ搔き出して、窓を引きあけて、小径中に叫んでやる、小径中の人々が聞かなきやならなくなる、その人たちが知っていることを、私は叫ぶんだ」

すると老女はギョッとす。そしてこの大きな驚きの中で、曇った鏡の中で、彼女は君の願いを叶えてくれる。彼女は自分が何をしたか知らないわけだが、曇った鏡の中では彼女はうまくやってのけたのだ。不安は激しさをまし、痛みはいよいよ歓声をあげ始める。君が叫び出すその前に、君にはもう子守唄がわかっている。おやすみ、坊や、おやすみ！君が叫びださないうちに、鏡は君をまた仄暗い階段の下に突き落とす、そして君が去るのに任せてやる。君に走らせてやる。早く走りすぎてはいけない！

地面から目をあげた方がいい、さもないと、君は下の、人気のない工事現場の周りに回らされた板塀のところで、男にぶつかることもありうるのだから。あの若い男、帽子を回しているあの男に。帽子を回しているから、君は彼だとわかる。あれは同じ人だ、この前、君の棺の傍で帽子を回していたのと。ここにまた彼がいる！彼は、あたかも姿を消したことなど一度もなかったかのように板塀に寄りかかって立っている。君は彼の腕の中に飛び込んでいく。彼はまたもや涙を流さない、だから君のを分けてやるといい。それから、彼に別れを告げるのだ、彼の腕につかまる前に。彼に別れを！彼が忘れたとしても、君はそれを忘れないだろう。はじめに別れを告げるのだということを。一緒になって先に行く前に、人のいない工事現場を囲む板塀の前で、永遠の離別……永遠にお別れしなくてはならない。

それから、君たちは先に進む。するとそこには、石炭庫のそばを海へと至る道がある。君たちは黙っている。君は最初の言葉を待ち受けている。君は彼にそれを残しておく、そうすれば、君に最後の言葉が残らないで済むから。彼はなんていうのだろうか。はやく、君たちが海辺に着く前に、海は人を不用意にさせるのだから！彼は何て言う？最初の言葉は何だろうか。彼を黙り込ませてしまうくらい、目を伏せなくてはならないくらい、難し

い言葉なのだろうか。あるいは、石炭の山がそうさせるのか。石炭の山は板塀の上より高くに聳えて彼の目の下に影を落とし、自らの黒さで彼の目を眩ませる。最初の言葉、今やもう彼はそれを言ってしまった。それは、ある小径の名前だ。老女のすんでいる小径は、そういう名前だった。果たしてそんなはずがあるのか。君が身籠っているということを彼が知らぬうちに、彼はあの老女のことを話す。彼が君を愛しているという前に、彼は老女のことを口にする。落ち着くのだ！彼は知らない、君がもう老女のところにいたことを、彼はまた知らないだろう、彼は鏡のことなど何も知らない。けれど、彼がそれを言い終わったが早いか、彼はそれを忘れてしまってもいた。鏡の中では、全てを話してしまう、全てが忘れられてあるように。そして君が子供ができたというが早いか、やはり君もそれを黙っておいてしまう。鏡は全てを反射する。石炭の山は君たちの背後に下がっていく、すると君たちは海に着いていて、白いボートが、問いかけるように君たちの視界の端にうつる。君たちは黙っている、海は君たちの口から答えを奪ってしまう、海は貪るのだ、君たちがまだ言い残していたことを。

それから、君たちは何度も何度も浜辺を、あたかも降りていくかのように登って、あたかも逃げ去るかのように家へと向かい、家に帰るかのように、去っていく。

彼らは、いったい何を白味がかかった帽子の中で囁いているのだろう。「死に際だ！」

彼らには言わせておこう。

ある日、天空がすっかり青ざめて、その青白さが煌めいてしまうほどになる。この最後の青白さをおいて、煌めきが他にあるだろうか。

その日は、曇った鏡が忌々しい家を映し出す。忌々しい、と人々はその家のことを言う、その家は取り壊されることになっている、忌々しい、と彼らはそれを呼ぶ、なぜなら彼らはそれよりいい呼び名を知らないからだ。君たちはそのことに驚きはしないだろう。天はもう十分に青白い。そして、天が青白くなっているように、家もまた永劫の罰のはてに至福を待望しているのだ。たくさん笑うと、涙が出てくることもあるだろう。君はもう十分に泣いた。君の花輪を取り戻せ！　今や君はまたおさげを解いても良くなるだろう。全ては鏡の中にある。そして、君たちがすること全ての背後には、海が緑色をして横たわっている。君たちが家を出ると、海は君たちの眼前に広がっている。

君たちが崩れ落ちた窓からまた降りてくると、君たちは忘れてしまっていた。鏡の中では、あらゆることがやっけてのけられる、それら全てが許されてあるように。

それから、鏡の中に一緒に入っていくと彼は君をせきたてる。けれども夢中になっているうちに、君たちは鏡から離れていく、砂浜から逸れていく。君たちは振り返ったりしない。そして、あの忌々しい家は君たちの背後に取り残される。君たちは川を遡っていく、すると君たち自身の熱は君たちに向かって流れてきて、君たちの傍を通り過ぎていってしまう。まもなく、彼の衝動も弱まるだろう。そしてその瞬間に、君はもうその気がなくなってしまう、君たちは物怖じしてしまう。引き潮になって、海があらゆる浜から引き離されてしまう。それどころかこの時には、川の流れまでもが引き潮によって水面を下げってしまう。川の向こう

側では梢がついに樹冠を散らしている。白いへぎ板の屋根がその下で眠っている。

気をつけて、彼がもうすぐに将来のことを話し始める、たくさんのこどもたちのこと、長い人生のことを。彼の頬は熱意のあまり上気している。その熱意は君の頬にも火をつける。君たちは息子が欲しいか娘が欲しいかで言い争う。君が欲しいのは男の子。そして、彼は自分の屋根を瓦で葺こうと思うのだが、君はというと……けれどもその時、君たちはもうすでに川を上り切って遠くまで来てしまっていた。驚愕が君たちを襲う。対岸のへぎ板の屋根は消え失せていた、向こう岸にはただただ低湿地と、湿っぽい草地在り広がっているばかりだ。そして、ここは？道のことを気にかけての方がいい！薄暗くなってきている。ただただ朝が明け染めていくみたいに、あっけなく。未来はいつってしまった。未来は川辺の、低湿地につながっている道だった。戻れ！

いったいどうなるのだろう。

3日が経つと、彼はもはや君の肩に手を回すことができなくなる。また3日経つと、彼は君に名前を訊ねる、君も彼に訊ねる。今や、君たちは互いの名前すらわからないのだ。そしてとうとう、君たちはもはや訊ねもしなくなる。そうした方がずっといい。君たちは秘密になってしまったのではなかったか。

今や君たちはまた押し黙って並んで歩いている。彼が君に何か訊ねるとすれば、雨が降るかどうかということだろう。そんなことが誰にわかるというのか。君たちはますます他人行儀になっていく。将来については、君たちはもうとっくの昔に話すことをやめてしまった。君たちは互いに会うことも少なくなってきているが、まだすっかり他人同士になってしまったわけではない。待て、我慢強く。いつかそうなるだろうから。いつの日か、彼が君にとってあまりに疎遠になってしまっていて、君が彼を暗い小径の開かれた門の前で愛しはじめる。全てのことに、そのものの時間というのがある。今、その時が来た。

「もう長くは続かないだろう」、君の後ろで彼らがいう。「もう終わりに向かってる！」彼らに何がわかるというのだろう。今ようやく全てが始まったばかりだということに。

その日がやってくる、君が彼に初めて会う日が。そして彼も君に出会う。

初めてだ、初めてということは、つまり、もう二度とないということだ。けれども驚いてはいけない！君たちはお別れを言い合わなくたっていい。君たちはもうとっくの昔にそれを済ませているのだから。もう済ませてしまったというのはどんなにか素晴らしいことだろう！

それは秋の日であるだろう。すべての果実が再び花をつけるだろうという期待に一杯になり、秋とはそういうものなのだが、秋はこの明るい靄と一步一步の歩みの間にある破片のような影を伴っている。君はそれで足を切ってしまうかもしれない。君がりんごを買いに市場におつかいにやられた時、君はそれに躓いて転ぶかもしれない、君は期待と嬉しさのあまり転ぶのだ。ある若い男が、君を助け起こしにやってくる。彼はただボタンをかけずにジャケットを羽織っているだけで、帽子を回して、何と書いていいかわからないでいる。しかし君たちはこの最後の光に包まれてとても陽気になっている。君は彼にお礼を言って、ちよっ

と髪を払いのける。すると留めてあったおさげ髪が解けて落ちてくる。「ああ」、彼が言う、「君はまだ学校に行っていないのかい。」彼は踵を返して歩いていき、口笛を吹いて何かの歌を奏でる。このようにして君たちは別れ別れになる、お互いにもう一度見つめ合うことなしに、全く痛みを伴わずに、別れたことを知りもしないで。

君はまた小さな弟たちと遊ぶことができる。君は弟たちと連れ立って川の流りに沿って歩いていける、ハンノキの下の川沿いの道を。そして対岸には白いへぎ板の屋根がいつものように、梢の間にある。未来は何をもたらすのか。息子ではないだろう。弟たちを未来は君にもたらした、きみが踊れるようにおさげを、飛び跳ねるためにボールを運んできた。怒らないで、それらが未来の持っているいちばん良いものなのだから。学校が始まるかもしれない。

まだ君は十分に大きくなっていない、君は校庭で休み時間の間列になって歩いて囁きあったり顔を赤くしたり、口に指を当てて笑ったりしなくてはならない。けれどもあと一年待つのだ、そうしたら君はまた縄跳びをしたり、壁の上にかかっている枝を取ろうとしたりできるから。

外国語を君はすでに習っていたのだけれど、そんなに簡単なままでいてはくれない。君自身のことばの方がずっと難しい。もっと難しいのは読み書きを習うことで、でも一番難しいのは全部忘れてしまうことだ。君が最初の試験で全てを知っていなくてはならないなら、君は最後にはもはや何一つ覚えてはいけなことになる。君は合格するだろうか。君は十分に黙ってられるだろうか。もし君が口を開くことを十分恐れているならば、全てがうまくいくだろう。

君は、学校に通っている子供がみんなかぶっている青い帽子を釘にかけて、学校を後にする。また秋が来る。花はもうずっと前にもう蕾になっていた、蕾は無になり、無は実になる。いたる所で子どもたちが家路についている、彼らは試験に合格したのだ、君と同じように。君たちみんな、もう何も覚えてはいない。君は家に帰る、君の父は君を待っていて、小さな弟たちは声の限りに叫んで君の髪を引っ張る。君は弟たちを落ち着かせて父を慰めてやる。

すぐに夏が、日の長さを連れてやってきて、間もなく君の母が死ぬ。君と君の父、君たちは彼女を墓に迎えに行く。3日の間彼女はぱちぱちと音を立てている蠟燭の間に、かつての君のように横たわっている。彼女が起きる前に、蠟燭の火を吹き消せ！ けれども彼女は蠟燭の匂いを嗅ぎつけて腕をついて起き上がり、静かに無駄遣いのことを咎めるだろう。それから彼女は立ち上がり服を着替える。

君の母が死んでしまったことは良いことだった、というのも、これ以上君は小さな弟たちを一人で相手にすることはできなかつただろうから。けれど今や彼女がここにいる。今は彼女が全てを世話してくれる、君にもずっとうまいこと遊びをおしえてくれる、どんなにしたって、十分うまくは教えられないものなのだ。簡単なことではない。けれど、これはまだなお最も難しいことではないのだ。

この上なく難しいことは、話し方を忘れてしまうこと、歩き方をわすれてしまうこと、ど

うしようもなくつかえつかえにはなすこと、そして地べたを這いずること、終いにはおむつに包まれることだ。でも一番難しいことは、愛撫に耐えて、ただ見つめること。我慢して！ すぐに全てが上々になるから。君が十分にか弱くなるその日を、神は知っていられる。

それは君の誕生の日だ。君は世界に産み落とされて、瞼を開けるけれど、光が眩しすぎてまた目をとじる。光は君の肢体を温め、君は太陽の下で動き出す。君はここにいる、君は生きている。君の父が君の上に身をかがめる。

「おわりだ」、君の背後で声がする、「彼女は死んだよ！」

静かに！ 彼らには言わせておけばいい。

訳：久保結菜

\*

## 小説から詩への小路

早稲田大学ドイツ語ドイツ文学専修 隣健斗

文学と聞いて思い浮かばれるのは小説であることが多い。テレビで観る文学賞のニュースは小説に与えられるものがしばしば、戦後のノーベル文学賞は辞退者含め 77 人を数えるが、そのうち 50 回ほどが小説家に与えられている。書店に出かけて目につくのは小説ばかりで、他の文学ジャンルは行き慣れた店でないを探すのに一苦労だ。文学の本道は小説である、このような認識は一般に違和感がない。

しかし、私たちが店頭で見つけるような小説は、19 世紀のフランスでバルザックやフローベールが形を整えた近代小説の流れを汲むものであり、今から 200 年ほど前に誕生した一つのジャンルであるに過ぎない。それよりも前では、例えば古代ギリシャのホメロスの叙事詩があるだろうし、旧約聖書やコーランの一部は韻文で書かれ、古代ローマにはウェルギリウスが、中世ドイツには『ニーベルンゲンの歌』が、ダンテ『神曲』が、文化レベルでもギリシャ悲劇が、アフリカの口承文学が、ドイツにはミンネザングが、中国には漢詩が、日本では和歌が、と例を挙げればきりがなくらいにこの世界は詩が豊かであり、人は歌い踊っていた。

自由詩を別とすると、詩と小説の大きな違いは韻文か散文かにあり、そして散文の起源の一つが韻文を平たくして意味を伝えるための注釈であったことを踏まえれば、文学を歴史において眺めるとき、散文である小説が文学の本道に躍り出たのはここ 200 年の話であり、それより前では韻文である詩が、久しく「文学通り」の真ん中を歩いていた姿がみえてくる。

さて、文学を背負うのは小説には荷が重く、詩に任せておいて、言ってみれば間道でやる

くらいが性に合っている、というようなことを言う作家が日本にいる。いた、と言うのが正しいか。この年の二月に亡くなられた作家、古井由吉だ。『漱石の漢詩を読む』では「思ひ出すことなど」の中にある漢詩を読み解き、数多くのエッセイや大江健三郎との対談集『文学の淵を渡る』などでも詩への言及をたびたび行う古井は、その著作の中で、例えば『やすらい花』では連歌を小説の中に持ち込むように、小説を詩との関係の中で考える作家と言ってよいだろう。この作家が題からして詩を問題にしていると分かるのが、エッセイ『詩への小路』である。

『詩への小路』は、小説家になる前の 20 代をドイツ文学者として暮らした作家による、ドイツやフランスの詩、古代ギリシャの悲劇を巡る随想と翻訳からなる本である。題名を素直に受け取れば、小説家である古井が、いわば間道の小説から本道の詩に至るまでの小路を歩いていくというエッセイになるだろう。エッセイの原義とは「試み」である。どのような試みが小説家としての立場からなされているのか。私が紹介したいのは中でも最後の「ドゥイノ・エレギー訳文」である。1875 年、当時オーストリア・ハンガリー帝国に属していたボヘミアの首都プラハに生を享けた詩人、ライナー・マリア・リルケの『ドゥイノの悲歌』を訳したものだ。

十歌からなる悲歌、英語ではエレジー、ドイツ語ではエレギーであり、エレギーとは古代ギリシャのエレゲイアーという詩形に端を発する。エレゲイアーはヘクサメーター（六韻律）一行とペンタメーター（五韻律）一行との二行単位の詩形である。リルケはこれを踏まえている。古井は「これを日本語に移すのは、すくなくとも私にとって、不可能であり無意味でもある」と断った上で、第一歌から第十歌すべてを通して、各歌の前後に古井自身の随想を加えながら、原文の改行は忠実に、散文へと訳するという大胆な試みをする。そしてこの訳自体も、リルケと古井に対するせめてもの礼儀として、原文と古井訳を辞書片手にたどたどしく読み比べた私の印象では、意味をただドイツ語から日本語に運ぶための言葉選びではない。訳文のレベルでも古井による解釈と思われる箇所がいくつかある。

エレギーである詩に、小説家である古井が散文に平たくしながら、随想を加えて迫ろうという試みの姿勢だ。何も奇をてらったものではない。もともとは文学の本道が詩であり、今は大手を振って歩いている小説を生業としながらも、小説を間道と捉える小説家が、なお小説に足場を求めて本道である詩に至るための方途として、散文に訳して注釈していくという小路を歩むのは、散文の起源を踏まえた小説家としてのこれ以上ない誠実な姿勢である。ここには散文の発芽がある。少なくとも、古井文学の発芽がある。

事実、第十歌を訳し終えた古井は以下のように言う。「訳詩とは言わない。詩にはなっていない。これも試文である。エッセイの地の文の中へ、仮の引用のようなものとして、入るべきものだ」と。引用が続いて恐縮だが、「自分のおこなっていることを私なりのエッセイズムという漠とした概念でつかむ」（『言葉の呪術』『私のエッセイズム』より）と、自らの創作を試文と考える作家にとって、まさに「ドゥイノ・エレギー訳文」は古井の小説に「仮の引用のようなものとして、入っていく」はずのものだ。古井文学の愛好者ならば、リルケ

の詩を読んでいるはずなのに、この「試文」の中に古井文学の香りを嗅ぐことになるはずだ。そして他方リルケを読むうえでも、元ドイツ文学者である小説家の慧眼を通して、『ドゥイノの悲歌』を再発見することになる。

どのような試みかの紹介は終えられたように思う。しかし、試みの結果を紹介するのは、他の古井文学に接するときと同様私の手には余るし、的外れなことを言って、古井由吉に手を引かれて詩を読んでいく小路を荒らしてしまうことを何より恐れる。最後に、四カ月に一歌なので三年ほどかかった、とある。小説家の本気の読みというものを思わされるところだ。私たちが詩を読むとき、意味を取ろうとすれば頭の中で何らかの筋を通していくことになるが、そこでは論理展開に適した散文で考えている。とすれば『詩への小路』は、詩と接する場合の最良の手引きとも読めるだろう。「しかし読むことは、下手は下手なりに、これも舞いではないか」。ここ 200 年、詩で舞うことが下手になった私たちに対して、この本は新しく詩と舞い、詩を舞い、詩で舞ってみせている。

\*

#### 思考の〈根〉を守る—ハンナ・アレント『独裁体制のもとでの個人の責任』を読んで

早稲田大学ドイツ語ドイツ文学専修 遠藤愛明

「絶望の唄を歌うのはまだ早い、と人は言うかもしれない。しかし、私はもう三年も五年も前から何の明るい前途の曙光さえ認めることができないでいる。だれのために仕事をしているのか、何に希望をつなぐべきなのか、それがさっぱりわからなくなってしまっているのだ」。…「私がこの世紀のドラマに何を見たかと言えば、最も悲惨な人間墮落の *comédie humaine* だけである」。——林達夫『歴史の暮方』より

林達夫という人物をご存知だろうか。1929 年から敗戦まで雑誌『思想』の編集を手掛け、戦後は平凡社に入社し『世界大百科事典』を完成させ、さらには戦後いち早く『共産主義的人間』（1951 年）においてスターリズムを批判したというような、先駆的な代表的知識人だった。岩波文庫に入っているベルクソンの『笑い』は彼の訳だ。

彼は 1941 年から戦後に至るまで一切の言論活動を休止した。さて、この林達夫の沈黙から我々は何を学ぶことが出来るだろうか、このように考えねばならぬ。危機の時代において嘆いていながら何もしなかった、そういう風に後世の者が批判することは簡単なことである。しかし自分がその時代に生きていたら、果たして時代に抗い生命を賭けてでも否を貫く勇氣はあっただろうか。

林が戦時中に言論活動をストップさせたことの重みは『歴史の暮方』の「絶望の唄を…」という書き始めから大変な緊張感をもって伝わってくるものであるが、その沈黙に

は、本当は何が含まれているのか、この文章に出会って以来自分の中に問いとして残り続けている。

先日ハンナ・アレントの『独裁体制のもとでの個人の責任』というシュピーゲル誌に掲載された記事を読んでいた（ちくま学芸文庫『責任と判断』所収）。そこにその沈黙の意味に対して、あるいはこういうことかもしれないという考えに出会った。

ことを拒んだ数少ない人々は、どのような形で他の人々と違っていたのか」ということに問いに対して、このように答える。「公的な生活に関与していなかった人々は、大多数の人々からは無責任と非難されたのですが、あえて自分の頭で判断しようとした唯一の人だったのです」。

アレントはさらにこう続ける。「(公的な生活に関与しなかったのは) 自分と仲違いせずに生きていくことができないことを見極めてからです。(略) 残酷な言い方ですが、こうした人々が殺人に手を染めることを拒んだのは、〈汝殺すなかれ〉という古い掟をしっかりと守ったからではなく、殺人者である自分とともに生きていくことができないと考えたからなのです」。「自己とともに生きていきたいという望みであり、自己と交わりたい、すなわちわたしと自己の間で無言の対話をつづけたいという好みを示すものです。こうした思考は、すべての哲学的な思考の〈根〉のところにあります」。(73頁)

この思考の〈根〉を守るための沈黙、それが林達夫の沈黙であったのではないか。その行為がどれほどの無理解と誤解を呼ぶか、我々の想像の及ぶところではないであろう。しかし林の沈黙を我々は純然たる「抵抗」として理解しなければならない。

「独裁政治のもとで公共生活に参加しなかった人々は、服従という名のもとにこうした支援が求められる〈責任〉のある場に登場しないことで、その独裁政治を支持することを拒んだのです。十分な数の人々が〈無責任に〉行動して、支持を拒んだならば、積極的な抵抗や叛乱なしでも、こうした統治形態にどのようなことが起こりうるかを、一瞬でも想像してみれば、この〈武器〉がどれほど効果的であるか、お分かりいただけるはずで

す」。(77～78頁)

## 愛・孤独・悲壮

2020/11/13

「英国のスパイ」と聞いたときに誰もが思い浮かべるイメージはどのようなものであろうか。英国流のかっちりとしたスーツに身を包み、美しく上品でありながらも獣のような攻撃性を秘めた車を乗りこなし、敵に対しては容赦無く引き金を引き、一瞬のうちに死体の山ができる。そしてバーでマティーニを一杯、というようなものか。まさに「男の色気」というものが凝縮されたような存在であろう。しかし誰しもこのような作品群を見て、これが本物のスパイ活動か、などとは微塵も思うまい。もしこのようなスパイがその辺をうろうろしていたら、カーチェイスは絶えないだろうし、各国の諜報部の予算はうなぎのぼりだろうし、街で破壊行為が横行するだろうし、第一死傷者ももっと多く出ているはずだ。つまりこれはあくまで創作なのである。それは銀幕から出ることもないし、現実性（リアルさ）を感じることもないだろう。

しかし、『裏切りのサーカス』<sup>1</sup>という映画はそうではない。妖艶な女性や、流麗なスポーツカーなど登場しないし、バーで“Vodka martini, shaken, not stirred”などとキメるシーンなど皆無だ。この映画は「男の色気」を堪能する映画ではなく、逆に圧倒的な「リアルさ」を体感する映画である。原作者のジョン・ル・カレはインタビューの中で、スパイの秘密の世界を一般の世界の象徴として描いたと語っている。スパイは嘘をつくのが仕事だ。そして仕事で得た情報は厳重に管理する。限られた人物にしかその情報は渡さず、またその情報源はたとえ上司や同僚に対しても明かさない。スパイの昇進の条件というものは、身元の明確さ、つまりは弱点がないことと、得る情報の正確さ、つまりは情報源の確かさで決まるそうだ。身元は出身から現在の友人、愛人まで探られ、過去どのような信条を持っていたかまで調査される。このような究極の秘密主義のところにいると、人は誰も信じられなくなる。しかしこれは程度の差は違えども、一般の世界でも感じられることではないか。誰しも嘘をつくし、信じられる人間など数えるほどしかいないと感じているだろう。つまりここで描かれるスパイの世界とは、圧倒的な身近さを持っている。隣の家ではスパイが密会をしているかもしれないと観客に思わせる。自分の生きる世界とそう隔たりがないことが示されるのである。そして登場するスパイたちも我々が生きていながら直面するような生の悩みを抱えている。それは、生き方や信条、そして愛の問題だ。愛の様々な形、そしてその引き裂かれる様が、繊細にそして効果的に描かれている。

スマイリー（ゲイリー・オールドマン）。彼はコントロールとともにサーカスを辞め、その後サーカスの最高幹部 4 人のうちにいる二重スパイを探る任務を与えられる。冷静沈着で、疑い深く、本当に必要があるときにしか口を開かない。恋愛には不器用で、それが彼の

---

<sup>1</sup> イギリス秘密情報部（ロンドンのケンブリッジサーカスにあることから通称サーカス）

弱点にも繋がる。彼の弱点とは、彼の妻アンとの関係だ。彼女は、夫の同僚であるビル・ヘイドン(コリン・ファース)と浮気している。スマイリーは心からアンを愛しているのだが、彼女は彼をあまり気にかけていないようだ。スマイリーは、アンに愛を受け入れてもらえないことにずっと悩み苦しんでいる。作品中で冷静な彼が唯一うろたえるのも、クリスマス・パーティーでアンとビルが庭で抱き合っているのを目撃した場面だ。しかしスパイとしてのスマイリーは私情によって、自分の仕事が脅かされるのを誰よりも嫌う。彼の理性は彼の仕事をあくまで冷静に求め続ける。資本主義体制の守護者であり、共産主義に対する最前線である自分の仕事を。この終わりのない戦いでは常に彼の理性が勝利している、つまり愛を押し殺しているところがスパイとしての彼が優れている点であるのだ。しかしこの戦いに常に勝利し続けているとはいえ、スマイリーの心情はそんな簡単なものではない。彼女への愛というこの感情の強さは何なのであろうかと自問を続けているその苦悩と混乱は彼の表情、態度ににじみ出ている。彼は同僚であり、またアンの浮気相手であるビルにもらった絵(彼が書いた絵である)をいつまでも部屋に飾っている。彼の心はそんなことを許すまい。それでも彼がじっとその絵を見つめるのは、その極限の状態(妻の浮気相手が描いた絵を見つめる)に自らの理性は未だ十分な抵抗ができていたという担保を得るためであり、それにより自らの内の溢れ出る愛と沸き立つ憎しみに対して蓋を押し付けることができるからである。そして、彼が過去にカーラ(ソ連のスパイ、顔は映画内に出てこない)に会って話したことを回想し、ギラムに聞かせるシーンでその感情はせき止めきれずに、しみ出す。彼はカーラに対して、妻の話をよくした。カーラの妻の為にも、とって亡命を勧める。そしてスマイリーはカーラに対してこう語る。

“We’re not so different, you and I.

We’ve both spent our lives looking for the weaknesses in one another’s systems.

Don’t you think it’s time to recognize there is as little worth on your side as there is on mine?”

ここには彼のスパイとしての顔は影を潜め、彼自身の感情が端的に現れている。資本主義、共産主義のためにお互いに文字通り「命を懸けて」働いてきたが、どちらの体制にもそれほど価値などないのではないか。なぜ彼が初めて会ったカーラに関してここまで話す気になったか。それは、スマイリーとカーラのスパイとしての生き様が重なったからであろう。お互いに私情を理性で押し殺して、この残酷で容赦のない世界を生き抜いてきた。一度たりとも仕事を二の次にしたこともなく、仕事に支障の出ることはたとえ愛であっても手綱を強めて好きにはさせなかった。案の定、カーラはその提案を聞き入れることはなく、モスクワへ戻っていった。スマイリーが妻からもらったライターを持ったまま…。

スマイリーとカーラの立場が逆であっても取った行動は同じであったらう。

ビル・ヘイドン（コリン・ファース）とジム・プリドー（マーク・ストロング）。彼らは若い頃から友人、恐らくは、否、間違いなく恋人同士であった。どちらも諜報部にいたことで、この愛は「国」との対決の場に否応無しに引きずり出される。ビルはスマイリーが追っているところの二重スパイであった。そしてジムもそれを知っていたようだ。しかし愛ゆえにそこに触れることができなかつた。ビルの正体を暴くことは、お互いの別れを意味するからだ。しかし、よりによってジムが二重スパイの情報を掴むことを目的として、ハンガリーに送られることになってから事態の均衡は破れる。それまで細い糸の上を歩きながらも、かろうじてバランスを保ってきた彼らの関係は、大きく揺さぶられる。結果ジムは自分と「国」の危険を顧みずにビルに事前にそのことを提供し、またビルも疑われる可能性を引き受けてジムの身の安全を確保する。仕事場では彼らの行動は明らかに「ミス」であろう。ただそうだとって彼らを責める気にはなれないし、まずできない。「人間」として愛に生きることは美しいことであるとされているからだ。相手に対する溢れ出る思いに身を任せ、相手に奉仕する、それは美しく、「人間」の「幸せ」ともいうことができるだろう。そして案の定、彼らの愛は悲劇的な週末を迎えることになる。ジムがソ連に送還される予定のビルをスナイパーライフルで狙撃し死亡させるのだ。ジムが打つ直前、スコープを覗いたときにビルがこちらに気づく。それを見たジムは一度スコープから目を離し、自分の涙の浮かんだ目で直接ビルを見つめる。そして次の瞬間一時の感傷を断ち切るように、ジムは引き金を引く。頬の上方、目の下方を撃たれたビルは、血の涙を流しながら倒れこむ。ジムの動機は何か。彼はビルの裏切りは元から勘づいていたし、殺されることくらいは覚悟してハンガリーに赴いたのだろうかから、それに対する報復ではない。それは、愛する人間と一生会えなくなる辛さではないか。愛というのはそんなに自分勝手なものではないと言われるかもしれぬ。しかし、愛というのは時として暴走し、自分勝手に振る舞い、その許し、庇護を求めるような性格を持っているのではないか。

この映画で示される愛と理性の対決への応答は大きくこの二つに分かれる。一つはビルとジム、またリッキー（トム・ハーディ）のような愛を最終的に優先させるもの、もう一つはスマイリー、またピーター・ギラム（ベネディクト・カンバーバッチ）のように理性的判断を優先させるものである。我々が日々過ごす日常においてもこれらは対立するものである。しかし日常で迫られるこの種の決断は先延ばしにできることが多い。しかしこの映画ではスパイという特殊な状況、その一時の判断がその人だけでなく、その国の将来までも規定するという極限の緊張感の中で示されることによって、その衝動的行動あるいは決断の迫真性が限界まで増加させられている。そこから導き出されるのは、どちらの判断をしたとしても、選択しなかつた方に対する後悔は消えるものではなく、自分の責任として孤独を引き受けていくことしかできないということである。人間はいくら他人に頼っても、他人からの名声を得ても、結局は究極的には一人なのである。しかしまたこの理屈がわかつたところで、何かそれを超えてその苦悩から解放たれて生きていけるわけでもない。このどうしようもない運命を引き受けている人間のことを「孤高」というのかもしれない。スマイリーの背

中にはその悲壮感と残酷さ、またそれに向き合おうとする強靭さが現れている。

Tsuruta Kenichiro

## 雑記

・この映画は間違いなく私が見てきたものの中で5本の指に入る傑作だと信じる。本文で触れることができなかつたおすすめポイントでも書き連ねておこう。

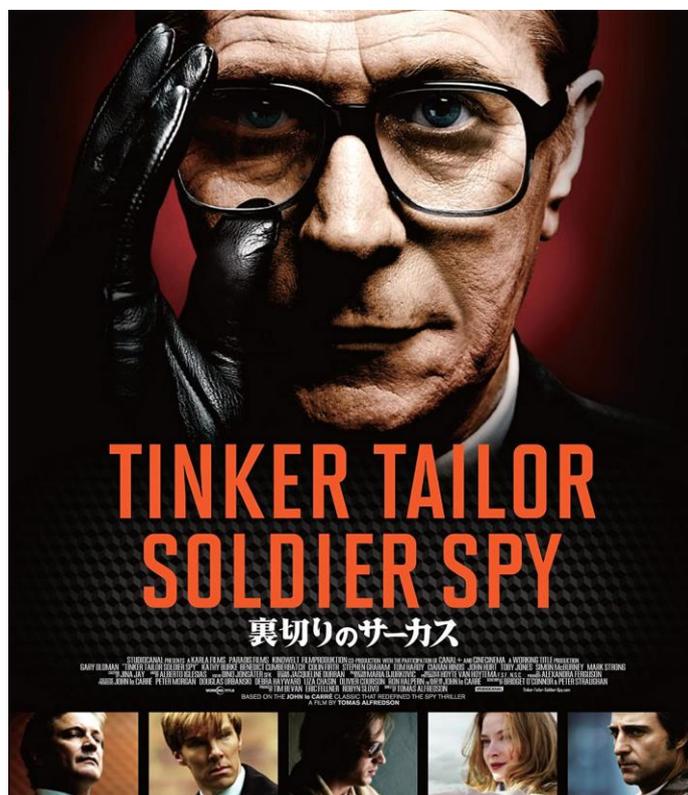
・俳優が皆素晴らしい。本作品はセリフがそれほど多いというシーンは少ない。それゆえに表情がものを言う。パーティーの場面の表情の送り合いなど鳥肌が立つほどだ。

・車の中に蜂が入っているシーンで、車を後ろから撮り、ギラムの焦った態度と、スマイリーの冷静な態度の違いが明らかになっている。

・英国諜報部は実際にクリスマス・パーティーを盛大に行っていたようだ。映画の中では、サンタがレーニンのマスクを被って登場し、ソ連国歌を盛大に歌う。この余裕がある辛辣なからかい方はなかなか好きだ。またこの時画面に一瞬映る、最初に歌い出す爺さんは原作者ジョン・ル・カレ本人である。

・スマイリーがカーラについて語る場所は特にゲイリー・オールドマンの演技が光る。スマイリーとしての感情の発露の仕方に注目である。

・ギラムが乗っている車は、シトロエンDS。ちなみに未公開シーンではロイ・ブラント（キアラン・ハインズ）の妻がダットサンに乗っていることが描写される。



## エボシ御前の物語

フラハティ陸

### Preamble

ダニエル・スラックという映画ブロガーのレビューを発見して、私はこの壮大な映画を再鑑賞する必要があると思った。私の興味の火付け役となったのは、この映画が自然対工業化や神対人間の物語以上のものであるという彼の分析だった。彼の中心的な主張は、この映画が西洋の宗教と東洋思想の概念の両方を採用することで、男性的な原型と女性的な原型の相互作用がみられるということだ。アブラハムの宗教は男性の原型に焦点を当てているのに対し、東洋の宗教は女性の原型に焦点を当てているという。これに関しては同意できない。だが『もののけ姫』の登場人物の人間性・人間関係により注目して観ようと思わせた。

ゾーエーのために『もののけ姫』におけるジェンダーの役割についての考えを書き出してみたらどうかと提案された。少なくとも自分の考えを整理するのはいいと思った。だが今は、これが他の人に見られることを考えると、躊躇してしまう。これには2つの理由がある。第一に、ジェンダーは非常に壮大で根源的なテーマだ。このトピックの専門家は数え切れないほどいるが、私はその中の一人ではない。スリッパを履いてアルプスを登ろうとしているようなことだろう。第二に、ジェンダーは現在、政治的、感情的に敏感なトピックである。自分の意見を言うと、自分のコミュニティ、友人、さらには家族から追放される危険性がある。考えを共有するのに躊躇するのは残念なことだ。これは壮大で根本的なトピックだからこそ、多様な背景を持った私たち全員がそれに取り組み、考えを共有する必要があるのだ。ゾーエーはそれができる場所だ。だからこそ、僭越ながら、『もののけ姫』のジェンダーについての私の考えを少しここで紹介したい。今回、私は「エボシ御前」というキャラクターを通して、男性中心の職場環境で女性達が活躍できるための近代的アプローチについての考えを少しだけ紹介する。

スラックは男性的な原型と女性的な原型に注目しているが、ジェンダーは『もののけ姫』の主要テーマではない。どんなに崩壊しかけた世界でも生きる意味はあるというのが映画のテーマだ。この映画は世界が腐敗していく様子とそんな世界で様々な方法で生きようとする人達を描いている。ただこのテーマの一面を見ることができると思う。

男性性と女性性という言葉についてだが、男性と女性とは緩く関連している意味で使う。『もののけ姫』の登場人物は伝統的に男性的・女性的とされてきた特徴の両方を持つ者が多い。エボシ御前は男性的な逞しい指導者でもあり、同時に母親のような思いやりと優しさもあわせ持っている。

## エボシ御前

『もののけ姫』においてもっとも目立つ関係性はおそらく主人公のアシタカと思想的中心であるサンとの関係だろう。しかし、他にも興味深い関係性は数多くある。アシタカの故郷の人達の平和的な関係、エボシ御前とモロ（母なる自然）の対立的な関係、サンとモロの親子の関係などなど。ここではエボシ御前について書く。

エボシは集落の指導者だ。身売りにされた娘達や病人、その他の社会的弱者達を保護した。合理的手段で自然を征服し、集落を守るために女性や弱者でも使える石火矢を生産していた。これにより集落内は安定と先進を得られたが、外向きには悪影響を及ぼした。製造過程で環境を汚染し、森の中に住む神々を怒らせた。その怒り・嫉みは遠くにあるアシタカが住む村の平和を乱した。その結果、婚約関係にあるアシタカとカヤを引き離すことになる。エボシはそれを知った後でも気にしていない様子だ。集落を守ることが最重要の課題と彼女は考えている。

**アシタカ** あなたは山の犬の森をうばいタタリ神にしてもあきたらずその石火矢でさらに新たなうらみと呪いを生みだそうというのか？！

**エボシ** そなたには気の毒だった。あのつぶて、たしかにわたしのはなったもの。おろかなイノシシめ。呪うならわたしを呪えばいいものを。

アシタカが頑張っ止めようとしている悲しみの連鎖の、映画で見せてくれる限りの根源は領主アサノとその公方配下の武者達にある。権力を持つ男達や弱者を迫害する者達かのびのびと生き、迫害を受ける社会的弱者に「生きることはまことに苦しくつらい…」と言わせる社会に問題がある。「世を呪い人を呪いそれでも生きたい…」という社会的弱者達を保護するため、エボシは合理的手段を用いて内向きな（集落に限定した）生きやすさ・豊かさを求める。

**エボシ** 森に光が入り山犬どもがしずまればここは豊かな国になる。古い神がいなくなればもののけたちもただのケモノになろう。さすればもののけ姫も人間にもどろう

エボシ御前は過酷な世の中を生き抜く近代人と重ね合わせやすい。特に男性中心の職場環境で活躍する女性達とその活躍を支援する者と重ね合わせやすいのではないだろうか。現代社会に見られる、男性中心の仕事環境でも女性が活躍できる工夫（卵子凍結、産休、育休など）はエボシの生産技術に似ていると感じた。外向きには悪影響を及ぼしているという意味ではなく、男性中心の環境によって生じうる生き辛さに対する技術的・システムティックな対策という意味で。ただ一つ悪影響を挙げるとしたら、女性にとっての壁が無効になり女性と男性のフィールドが均一になって、そのような措置を利用しないで仕事から離れる女性を見下す者がいる。つまり成功というのは、男性中心の環境でしか得られなくて女性は

その中で戦わない理由がないかのように言うのである。エボシ達は技術を活かし生き抜いているが、アシタカの故郷では男性と女性の協力で生き抜いている。アシタカがいるから村の女性は剣を振る必要はない。

### 最後に

エボシ御前の物語では社会的弱者を迫害する腐敗した者がいて、エボシは生きるためにそして守るために石火矢を生産する。環境汚染で森を怒らせ、遠い地の平和を乱す。そのうらみと呪いがアシタカの物語へと届く。腐敗した世界を癒す解決策はこの映画では提案されない。近代的な策でも内向き・限定的なように描かれている。アシタカが癒しをもたらす救世主になれるかのように見えるが、まだまだ先が長い印象で終わる。上の世代は怒り・嫉みにあふれた世界を生き、死ぬ。若い世代は自分自身の怒り・嫉みをどうにかしようと思いはじめたところだ。苦闘し続け、生き続ける。自分らの時間が来るまで。

※

### このホラーがすごい！第2回（前編）「現代の正統派ホラー作家 うぐいす祥子」

東京大学4年 下山航輝

現代は、ホラー漫画隆盛の時代である。2016年には、マンガ文化研究家である米沢嘉博による、初の本格的な怪奇マンガの通史である『戦後怪奇マンガ史』（鉄人社）やマンガ評論家であり編集者でもある川勝徳重によるアンソロジー『現代マンガ選集 7 恐怖と奇想』（ちくま書房）などが発行されるなど、怪奇漫画というジャンルの学術的な価値も再評価され始めている。

そんな現代ホラー作家の中でも近年注目を集めているのが、うぐいす祥子（ひよどり祥子）である。もともと同人作家として活動していた氏は2003年にデビューして以来、ホラー専門誌「ホラーM」にて短編を発表した。その後、2011年から連載開始した『死人の声を聞くがよい』で現代怪奇漫画家として地位を確立した。2020年現在は、講談社の「少年マガジン R」誌にて『ときめきのいけにえ』という恋愛ホラーを連載している。



『死人の声を聞くがよい』ひよどり祥子、秋田書店。ちなみにうぐいすは気分によってペンネームを使い分けている。

今回は、彼女の経歴を最初に紹介したのち、作品のいくつかを紹介していきたいと思う。

## ひよどり祥子の来歴

長崎県出身。大学卒業後、古本屋で買った『ワイルド7』に衝撃を受けて漫画家を志す。でも、なぜかデビュー作は恋愛4コマ。ホラー漫画誌『ホラーM』で活動後、単行本『闇夜に遊ぶな子供たち』『フロイトシュテインの双子』を発表。2011年より、ひよどり祥子名義でチャンピオンRED（秋田書店）にて『死人の声をきくがよい』を連載する。好きな映画は『スパイダー・ベイビー』。（『悪い夢のそのさき…』より）

雑誌『幽』に掲載された押切蓮介との対談によると、うぐいすはホラー好きになったきっかけを、幼少期に身近にある怖いものに触れた経験にあると述べている。また、椋図かずおや好美のぼるなどの影響を受けたと発言している（『幽』30号、p88）。

ホラー作家には、自分自身の鬱屈した経験を基に作品作りをするタイプと他作品にインスピレーションを受けて自信の作品作りに生かすタイプがいるように思われる。インタビューなどを見るにうぐいすは、明らかに後者の作家だといえよう。

そのことを端的に示すのが、彼女の作品の題材の豊富さだ。代表作である『死人の声をきくがよい』は、1話完結ものではあるのだが、1巻だけ見ても孤島のカルト、河童のミイラ、廃墟の遊園地、隙間家族、孤島の洋館——などと、どこかで見たことあるようなテーマが多い。実際、それらは古今東西の様々なホラー作品ですでに扱われたことのあるものばかりだ。それでも意外性を感じさせられてしまうのは、ストーリー展開の巧さ、“グロい”コマの見せ方、キャラクターの死にざまの豊かさ（ぽっと出のキャラクターは基本死にます）など、見せ方がうまいからだ。絵の感触自体は、アナログで制作していることもあり一見すると古さも感じられるが、うぐいすの大胆なアレンジによってモダンな雰囲気が高められていると言えるだろう。

うぐいすはホラー映画好きを公言しており、作品にもその影響が散見される。有名どころでは、カルト映画監督ルチオ・フルチの『ビヨンド』の有名なジャケット絵をリスペクトしたシーンや『バーニング』のハサミ男のオマージュであろう怪人などがあげられる。



『ビヨンド』と『死人の声を聞くがよい』の一コマ

このように、過去のホラー作品へのリスペクトも欠かさないところが、多くのホラーファンに親しまれる要因でもあるのだろう。

なお、同人出身の作家の多くはそうだろうが、うぐいすの同人時代の作品は部数も限られているうえ電子化もされていないため、中古書界限では驚くほどの値段で取引されている（最近だと、20,000円にて販売されていた）。そのうちの一冊である『ふたりのひみつきち』は、ホラー漫画収集家でありアマチュアの編集者でもある緑の五寸釘氏が、「歴代のホラー漫画で10本の指に入る超傑作短編集」と称賛する作品なのではあるのだが…。

(<https://twitter.com/TORAUMAHELLO/status/132202072539012710>)

同作品が紙で読めるのは、まだだいぶ先のことになりそうである。

前半では、現代ホラー漫画家であるうぐいす祥子の概要を紹介した。後編では、具体的な作品を紹介しながらその良さを知っていただければと考えている。

## 参考文献

うぐいす祥子『悪い夢のそのさき…』ホーム社、2018年  
朝宮運河「うぐいす祥子(ひよどり祥子)×押切蓮介 平成デビュー二人が語る怪談漫画」、  
三宅信哉編『幽』(30)、pp.86-9、KADOKAWA

---

## 第5号目次

1. イルゼ・アイヒンガー『鏡物語』について 久保結菜（早稲田独文）
2. イルゼ・アイヒンガー『鏡物語』 訳：久保結菜
3. 小説から詩への小路 隣健斗（早稲田独文）

#### 4.思考の〈根〉を守る

—ハンナ・アレント『独裁体制のもとでの個人の責任』を読んで 遠藤愛明（信愛学舎 早稲田独文）

5.愛・孤独・悲壮 映画『裏切りのサーカス』について 鶴田健一郎（信愛学舎 早稲田哲学科）

6.エボシ御前の物語 映画『もののけ姫』について フラハティ陸（信愛学舎 早稲田理工）

7. このホラーがすごい！第2回（前編）「現代の正統派ホラー作家 うぐいす祥子」 下山航輝（信愛学舎 東京大学教育学部）

#### 第5号について

今回は「芸術・文化の秋」をテーマに組みました。早稲田大学独文修士のお二人にもご寄稿いただきました。久保さんにはアイヒンガーの『鏡物語』の翻訳とその解説を、隣さんには古井由吉『詩への小路』所収のリルケ『ドゥイノの悲歌』（ドゥイノ・エレギー）を中心としたエッセイを書いていただきました。ドイツ語圏文学の散文と詩が揃って、編集部は大喜びです。

Zoeにおいて信愛生以外に原稿を依頼するのは今回が初めてですが、今後も不定期に続けていきたいです。お二人とも、本当にありがとうございました！ いつか共同訳とかもやってみたいな…（笑）。

信愛組、編集部の遠藤（独文です）はアレントのエッセイを読んだ感想、鶴田さんには『裏切りのサーカス』についてのエッセイを書いてもらいました。「雑記」という名の見どころ紹介付きです。（スマイリーが映画の冒頭で泳ぐシーン、あの池は苦行ですね笑。）

フラハティさんには映画『もののけ姫』について書いてもらいました。「夏のジブリ特集」ということで前号の掲載予定でしたが、今回ついに実現しました。最後に、下山君には第3号の「このホラーがすごい！」の続編を書いてもらいました。

第5号の表紙は菅家さんが担当してくれました、ありがとうございます。

今回は合計7作品、ページ数23とかなり充実した仕上がりになりました。

それでは次回第6号もお楽しみに。

—編集部 遠藤

今回のZoeは散文と詩、講演録、実写映画、アニメ映画、漫画と、さまざまな形態の作品についての文書があつまりました。書いて頂いた皆さん、ありがとうございます。そして今回の表紙は菅家さんが撮った写真です。読書会や映画会のように能動的にインプットする会になっているように、Zoeがアウトプットする機会になっていることを嬉しく思います。今後も皆さんが興味を持っていること、取り組んでいることを知れたらと思います。

—編集部 フラハティ